

足立の教育

足立学園中学校・高等学校 広報誌

No.57

特集

体験から学ぶ

—体験を通じて育む志、価値観、そして成長—



インタビュー 第17代校長 瀬尾 匡範 先生

記事

- ・探究論文
- ・中高1年学年主任より
- ・令和7年度進学実績と進学指導
- ・足立のICT
- ・体育祭と学園祭
- ・OBの活躍：和辻 龍さん
- ・部活動大会戦績

グローバルプログラム

修学旅行：シンガポール
オーストラリア・スタディーツアー
アフリカ・スタディーツアー
ラオス・スタディーツアー

走馬灯のごとし

中学、高校、青春時代

理事長 初鹿野 恵太郎



私は、元祖団塊の世代と呼ばれた太平洋戦争終了後二年目に誕生、敗戦国として国全体が大変厳しく貧困な時代でした。現在のように簡単に何でも手に入る時代ではなく、また、田舎育ちでしたので近くに店もなく、また、医者や幼稚園、学習塾もなく、小学校へ入る迄、読み書き等、色々と習得できませんでした。小学校も家から約一時間、中学校は小学校から更に、ニキロ程遠方でした。現在と比較してみると、信じられない環境でした。

自分の体験を通して生徒に学んでほしいことは色々ありますが、その一つに自転車での一人旅が、現在の私の人間形成に役に立っていると思います。自転車なら、お金をかけず遠くに冒険できると考えました。初めての旅は、小学校五年生の時に完成した現在の東京タワーでした。（昭和三十三年）父の実用自転車で道路地図を持参し、走ったのが始まりでした。朝早く出発し、帰りは夕方になりましたが、親は小言も言わず、褒めてくれたのが嬉しく、自分なりに目的が達成できた満足感もあり、少し自信につながったように思いました。その後も自宅から、筑波山、日光、房総半島一周、三浦半島一周、東北の蔵王のエコラインから山形の上の山、五色沼コース、そして新潟県の上越市からフェリーで佐渡島に渡り、完全一周。また本州に戻り、富山県、石川県と走り、能登半島一周し、家まで戻り、今度は自宅から九州一周と挑戦し続けました。まさにサイクリング少年でした。当時はアルバイトで購入した十五段ギヤ付スポーツ自転車で、一人用の TENT や、修理道具一式、カメラ、ユースホテル会員証、食料品をバッグに詰め、スタートしました。それぞれの挑

戦に沢山の思い出があります。中でも能登半島一周では、集印企画があり（四十カ所程）全て達成したので石川県観光協会から、感謝状と、野洲人の章の記念品を頂きました。そして旅先で多くの人たちに親切にして頂きました。お世話になった方々には感謝しても感謝しきれない程でした。その思い出の地に、令和六年一月一日、大地震が発生しました。その後も大水害と大災難が続き、無念であります。

本題になりますが、何日も自転車で走っていると、疲れもたまり自転車に乗りたくない時が何度もありましたが、ペダルを踏まなければ一步も一メートルも進まず、目的地にも行けません。この時こそ自分に鞭打って勇気を持ってペダルを一步踏み出すこと、スローペースでも走り出し、前に進むことが大切だと理解しました。旅行中は毎日自分との戦いの繰り返しでしたが、それを乗り越えないと目標は達成できませんでした。皆さんも“志”に向かって、日々、少しでも良いので自転車のペダルのように、“最初の一步”を踏み出しましょう。そして継続と努力こそあれば、色々な挑戦で必ず明るい未来が開きます。期待しています。頑張れ、足立学園魂で。





第17代 校長 瀬尾 匡範 先生 インタビュー

——第17代校長ということで、ぜひ先生のお人柄を知りたい方もいらっしゃると思います。どんな学生時代を送られてきたのか、教えてください。

とにかくパワフルでした。中学生の時は、学校に行って勉強して、昼休みは遊んで、また勉強して、剣道部の稽古に行って帰った後に友達と野球とかサッカーをして遊んで、その後剣友会で稽古して、という日々を送っていました。部活動自体は週3回しかなかったこともあって、集中して取り組んでいたと思います。だから部活動が無い残りの日は、学校帰りからすぐに遊びに行き、体を動かしていました。疲れてはいたはずですが、また次の日も同じような事をしていました。大したものだと、振り返ってみて感じます。

高校生になると毎朝5時に起きて、通学に1時間半かけて学校に通っていました。JR中央線の満員電車に乗るものだから、サラリーマンに挟まれながら、立ったまま寝て通学していました。参考書なんて開ける状態じゃなかったです。挟まれた状態で持っている鞆から手を放しても、その場に残っていて、また掴むことができるくらい、凄い混雑の中を毎日通っていました。それでも勉強はやりましたし、部活動も毎日参加していました。最初は電車の中で勉強していましたが、疲れているし、車内は温かいし、結局、通学は睡眠時間に充てるようになりました。

大学に進学すると更に激しくなりました。二部学生として、学費を稼ぎながら、大学に通っていました。そのため、

大学の始業前にはアルバイトがありました。先生になるために大学に進学したので、アルバイトも様々な職業にチャレンジしました。アルバイトに行き、大学に行き、もちろん大学の二部の剣道部にも参加して、他校の剣道部の練習にも混ざって、さらに足りないと思えば地元の体育館を借りて、稽古が終わるのが21時頃でした。それで剣道の仲間とご飯を食べに行き、深夜帰ってきて翌朝にはまたアルバイトに行くという生活を送っていました。

——特に印象に残っているアルバイトは何ですか？

喫茶店など、いろいろなアルバイトを経験しましたが、一番印象に残っているのは大学4年生の時にやった、印刷関係の会社です。世の中の仕組みや流れが分かって面白かったからです。大手印刷会社から下請けの企業に仕事の依頼が来て、広告に載せる商品のサンプルを持って写真を撮って、終わったら持ち帰って企業に返却して、印刷の機械で出すための刷版を作るといった作業を、足を運んで見てくれるわけです。お金の話もそこで学びました。企業から仕事を受けた大手印刷会社が受け取るお金から、下請けの自分たちに入ってくるお金があって、更に写真を依頼した人に支払うお金も発生しているわけです。物の値段や社会の仕組みを、この印刷会社で学ばせてもらいました。社会の縮図そのものだなと感じたのを覚えています。その会社では車に乗って、色々な会社や現場に回る必要があったので、効率化するということが覚えられました。都内の範囲を一筆書きで回ってこられるような道順を考えて行っていました。

——そういったご経験をされてから、教員になられたんですね。先生になる時には、どんな先生になりたいと思ってらっしゃいましたか？

好きな数学を教えられて、剣道ができると思いと思っていました。そのため、そこまで高い理想があったわけではないのです。でも、数学は苦手になったり、嫌いになったりする生徒が多いと思います。嫌いになってしまうことは仕方ないけれど、その授業を聞いていたらわかるっていう感覚を持ってほしいと思って授業に臨んでいました。面白い授業はなかなかできませんが、分かりやすい授業をするように常に考えていました。

授業で生徒の顔を見ていると、理解した時には、わかった!という顔をするんです。そして、わかっていない表情をしていたら言い方を変えてみたり、少し戻ってみたりしながら授業を進めていました。ある日、授業をしていて黒板に向かって書いて、生徒の方を振り返ったら、当時の校長先生が真ん中の席に座っていました。すごく驚いたんですけども、いつも通りの授業をしました。特にその日は説明した後「わかった?」と生徒に聞いたら「わからない」となり、じゃあ前にやった内容をもう一度やるぞ、となって「わかったか?」と聞いたら「わからない」となりました。どんどん前にさかのぼっていくという前代未聞な授業を終えた後、校長先生がいらして「生徒と上手にやっているようだね」と声をかけてくれたのを覚えています。教員側から投げっぱなしの授業ではなくて、キャッチボールをしながらやるということはとても大事だと思っています。

——先生自身が教壇に立たれていた経験から、今の足立学園の教員に求めたいことは何ですか？

先ほどのキャッチボールの話じゃないですが、今はタブレットPCがあって、電子黒板があってと見なくてはいけなものが多くなっている分、生徒の顔をちゃんと見ることができているのかなと思います。情報を伝えることが簡単になった分、生徒の反応を見ずに進んでしまうことはあると思います。そのため、いざ指名して解答させようと思ったら「わかりません」じゃあもう一度説明するよと、なりにくいのかなと感じます。先生方が一生懸命やってくれているのは十分に伝わっていますが、今以上に、ぜひ授業の中で、生徒の表情を見てあげて欲しいと思います。

——今の足立学園の良いところをぜひ教えて頂きたいと思います。

ジェンダーや多様性など気を遣う方面が多い時代だけれども、今だからこそ男子校であることをずっと引き継いでいる良さがあると思います。様々な生徒が昔からいましたが、今は特性を持つ生徒や個性豊かな生徒などバラエティが増えて、そのうえで皆が認めているような雰囲気があると

思います。昔は俗にいう男子校っぽい男子校だったと思います。下町の根強さや、人間関係の力強さを感じることも多かったです。今は色々な地域から集まってくるので、下町っぽさは薄れてきているかもしれないと感じます。北千住という街自体もかなり変わってきたので、余計にそう思う面もあるかもしれません。

——では、足立学園でもっとこうなってほしい、という希望や課題はありますか？

基本的には今やっていることを引き続きやっていければいいと思っています。ただし、男子しかいない環境ですから、やりたいことには遠慮しないでどんどん挑戦していければいいと思います。悪い事じゃなければ、という前提はありますが(笑)今の生徒は素直で真面目で、優しい人が多いです。ただ、今の時代、一歩間違えると世間が悪い事に手を染めさせようとする。素直な分、そういうことに引っかかりやすいと危惧しています。昔の悪さをする生徒が多かった時代は、悪い事をしたり言ったりすると、すぐ先生に見つかって怒られていました。手を出したらケガをさせた、物を壊したといった証拠が残るけれど、今はスマートフォンに指先一つで、人がいない所で取り返しのつかない事ができてしまう。そして発見が遅れてしまうので、先生方は本当に大変だと思います。だから、素直なことは悪い事ではないけれど、自分の身を守ることやそのためのルールを生徒たちにしっかり学んでほしいと思います。

あとは、志共育。前校長の井上先生になってから、進学は志のためにあるということと探究活動を進めてきました。もちろん進学先の学校名にこだわる人もいると思います。そういう人はその目標を達成すればいいでしょう。でも難関大学に入学できたからそこで人生が終わりではないですから、何を成し遂げたいかに基づいた人生設計をしてほしいと思います。それを生徒たちに考えてもらうことが志共育だと思っています。志共育も探究活動も今後進歩していったいいです。

——最近では単位制の高校・大学といった仕組みもできましたが、学校としての在り方などどう思われていますか？

これから子どもがどんどん減っていったら、本校の生徒の入学者数もどうなってくるかわかりませんが、人間である以上、人と触れ合うことが大事だと思っています。そのために学校に行くっていう意味があるのではと思います。人と触れ合うことによって、人に対する思いやりや、嫌なことをされたときの気持ちがわかるわけです。学力、知識を入れるだけなら家で学ぶことができます。もちろん集団の中に入ることが苦手、難しいという人もいます。でもその集団で何かをするでもなく、いるだけでいいと思います。ウケること

を言わなくていい、ウケることを言う人の言葉を聞いて笑ってればいいと思います。高校生までは学校とか部活動の知り合いくらいしかいないかもしれないけれど、大学だと色々な地方からもくらし、様々な背景、年齢の人たちとも出会うようになります。その出会いが大切だと思います。

——今年度、「志くゆめ>への挑戦」を掲げられていますが、どんな思いを込められていますか？

なんでもいい、とにかく自分がやりたいことに挑戦していけばいい。ただ、やるからには一番目指してやるくらいの気持ちを持ってほしい。そんな思いです。先生方にもどんどん挑戦して欲しいと思います。国語の先生が英語検定Ⅰ級を目指してもいい、他のことでもいいです。

——瀬尾先生は、剣道で上の段を目指して稽古されていると伺った事がありますが。

そう、自分の挑戦は剣道で上の段を目指すことです。これが世のため人のための志かどうかという、意味合いは違うかもしれないです。でも、もしこの学校を引退した後、どこかで剣道を指導する機会を得たときに、自分が最高段位であれば、同じ道を選んでいる人たちを幸せにすることはできるのかなと思っています。

志という言葉が難しい、掴みにくい人は、単純に夢から始めていいのではないのでしょうか。夢を持つことは、それを実現させようと強く思い、そのために行動することに繋がります。そこで失敗したら反省して、反省した上で更に考えて行動する。そうしているうちに志になっていくと思います。だけど、例えば足立学園に合格することを夢にしてしまったら、合格したら終わってしまう。だからもう少し先の夢を描けばいいと思います。中学校、高校に入りたから勉強する、のではなくて中学校、高校で何かをやりたいから勉強するに変えれば、それは志の入り口になるのではないのでしょうか。

——志をゴールとしたときに、そこに行くまでの道なりや過程をきちんと考えようということでしょうか。

目標や夢が決まっていれば、何をしなければいけないというのはあると思います。そこを教えて導いてあげなければいけないと思います。私が先生になりたいという夢がまだなんとなくの形でしか思い描いていなかったころには、学校に行くのだから勉強はしなきゃいけないものだという意識でやっていました。勉強して、友達と遊んで帰ってきてという生活を当たり前を送ってきていたから、学校に行く価値とか、そんなことを考えたことはありませんでした。でも、先生になりたいと本気で思った時に、教員免許を取るためには大学に行かなければいけない。大学入学を目指すためには勉強しなきゃいけない。じゃあ何の先生になるのかによって勉強するものが違うので、何の教科の先生になるのかという風に、どんどん今やるべきことが見えてくると思います。でも部活

動もしっかりやりたい。塾に行く時間はない。それだったら授業をしっかり聞いて学校の勉強で結果をださなければいけないと思っていたので、学校の授業は真面目に聞いて、帰りが遅くなるから、宿題もその日の休み時間に終わらせてしまっていました。一度、理科室で授業を受けている時に、私の頭越しに両脇の同級生が私語をしていて、どんどんイライラしてきて「俺は授業聞いているんだよ!」って怒ったことがあったんです。卒業して、大人になってからクラス会とかで再会した時に「あの時はめちゃくちゃ怖かった」と話のネタになるくらいに怖い顔で怒ったみたいです。でも、それくらい私の中で授業を聞くということは基本であって、学校の中で勉強を完結させるようにしていました。

ただ、それですべてが上手くいったわけではなくて、やはり家庭学習はしていなかったわけですから、結局浪人することになりました。でも、それで得た経験や苦労があって、今がありますし、教員になって教壇に立つという夢は叶えられたわけです。

——先生がおっしゃった「今やるべきこと」はすべてに通じる事だと思います。「今何をする時間なのか？」は全てに対しての問いになりますね。

そう、全部中途半端になると、気が散って余計なことを考えてしまうと思うんです。気持ちを切り替えて、遊ぶ時に目いっぱい遊んで、勉強しなきゃいけないときはパッと切り替えて勉強する。部活動に打ち込むときは集中する。そういう切り替えをしっかりすることが大切です。グラグラしているとそうしたスイッチが入らない。時間を上手く使えるようになると、集中力も高まると私は考えています。



体験から学ぶ

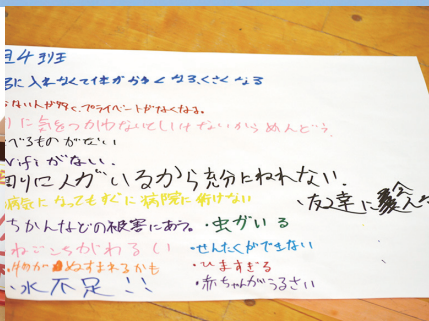
— 体験を通じて育む志、価値観、そして成長 —

近年、スマートフォンや配信動画、生成 AI などのデジタルツールの発展により、自分が体験をしなくても見聞きできるようになってきました。しかし、知識として一般的なことがわかっていたとしても、それが全てに適用されるかは違う問題です。普段、食事の際に口にしているご飯が、種まき・田植え・稲刈り・脱穀を経て販売されていることは知ることができても、どの地域で何の品種が栽培され、種まきから稲刈りの間の田んぼをどのように管理し、販売ルートにどのように渡りのかままで、こと細かく知ることは文字や写真、動画だけではわかりません。ぬかるんだ田んぼに踏み入れた足を一歩進めることの難しさ、泥の中に棲む生物たち、トラクターの大きさ、山の空気—。体験することで初めて理解できることが、この世の中にはたくさんあります。足立学園では震災・農業・保育・職業の体験を通じて学び、志を育てるきっかけや精神的成長に繋げています。

高校1年生 新潟防災体験と田植え

新潟県新発田市にて防災キャンプ体験と田植えを行いました。提供される食事は非常食、限定された水、寝る場所は体育館にアルミシートを敷き、毛布1枚で過ごします。被災した方と同じ体験をすることで、天災への心構えを見つめ直せたことでしょう。

田植えでは地域の方と一緒に作業を行いました。貴重な経験になったと思います。





収穫は春 高校1学年担任 土屋 慶文

令和7年度の高校1年生校外学習は、初の試みとして新潟県新発田市にて行われました。2つの隊に分かれ、日程を1日違いで実施したことなども含めて、初物尽くしの校外学習となりました。大きなトラブルもなく、各隊が全日程を終えることができたが、すべては新発田市観光振興課の皆さんの熱意と、新発田市の方々の温かいおもてなしのおかげであったと感じています。

下見に訪れたのは3月26日のことでした。道路脇にはまだ雪が残る場所もあり、コートが手放せない気候の中で、その後お世話になる多くの方々と挨拶をしました。新発田市観光振興課の皆さんの本気度が特に強く感じられて、市を挙げて今回の受け入れに力を入れてくださっていることが伝わりました。荒涼とした水田地帯のど真ん中で、「ここに本当にお米が実るのだろうか」と思いながら農業法人の方と打ち合わせをしたことも印象に残っています。

どきどきしながら本番日を迎えましたが、遅れる生徒は1人も出ず、順調に進んでいきました。廃校施設を利用した防災キャンプは正直かなり過酷でしたが、厳しい寒さにも、大量のカメシの来襲にもめげずに生徒たちは真剣に取り組むことができました。初日の昼から2日目の朝まで、3食続けて非常

食しか食べられないプログラムだったので不満が出るのを覚悟していましたが、最後まで非日常を楽しみ続けた生徒のたくましさを感じました。

2日目は、いよいよ、田植え体験を実施しました。快晴の青空の下、バスに乗り込み会場付近へ到着すると、そこには、農業法人の皆さんだけでなく新発田市観光振興課の職員さんたちの顔も見えました。しかもみなさん作業着を着て、泥にまみれた姿をしています。生徒がこれから田植えをする田んぼに、人数分の補助線を引く作業に従事してくださっていたのです。まめやかな心遣いに感激しました。

生徒たちは、新発田の皆さんのおもてなしの気持ちに応えるように真剣に田植えに取り組みました。作業に飽きそうになる生徒や、苗を雑に扱いそうになる生徒も出ましたが、「これは食べ物になるものだぞ」とたしなめる声が生徒の中から出たことを非常に嬉しく心強く思いました。

初めての試みだらけの校外学習は、苦勞することばかりでした。何度か安易に妥協しかけたのを止めてくれたのは常に、生徒のたくまさと成長する姿でした。あの春の日、私はすでに豊かな収穫を手にすることができたように思います。

中学1年生 農業畜産体験



中学1年 農業畜産体験（命の授業）について 担当 山口 裕朗

真夏の太陽が容赦なく照りつける7月末、中学1年生は長野県白樺湖周辺にて2泊3日の林間学校を実施しました。集団生活を通して「生きる力」を育み、自然や仲間と深く関わるとともに農業畜産体験を通して「命の大切さ」を学ぶことを大きな目的としています。

2日目に行われた鷹山ファミリー牧場での農業畜産体験は、今回の林間学校の中心となる学習でした。畑ではマルチ張りから苗の植え付けまでを体験しました。炎天下の中、額に汗を光らせながら作業に取り組む姿からは、普段の学校生活では得られない集中力と忍耐力が感じられました。「野菜を育てるのは想像以上に大変」との声が多く聞かれ、日常の食事に対する感謝の思いを改めて持ったようです。

畜産体験では、牛のブラッシングや乳搾り、山羊の散歩などを行いました。大きな牛の体に最初は戸惑う生徒もいましたが、恐る恐る手を伸ばし毛並みに触れると、その温かさに自然と笑顔がこぼれました。実際に乳を搾ったときには「本当に牛乳が出てきた!」と歓声が上がリ、命をいただくことの現実を自分の体で理解する瞬間となりました。動物と直接関わる中で、「命をいただく」という言葉の重みが生徒一人

ひとりの心に深く刻まれたようです。

また、体験の合間に現地スタッフの方々から、農業や畜産に携わる人々の思いや工夫を伺うこともできました。生徒たちは「生産者の努力があるからこそ毎日の食卓がある」という事実を学び、普段当たり前に口にしている食べ物の背景に思いを馳せる貴重な機会となりました。

それ以外にも、1日目のオリエンテーリングでは協力して道を探す中で助け合いの大切さを学び、3日目の飯盒炊爨では苦勞して炊いたご飯やカレーを分け合う喜びを味わいました。どの活動も生徒たちの成長につながりましたが、とりわけ農業畜産体験での「命の授業」は、多くの生徒にとって心に残る体験となったようです。農業や畜産の現場での学びは、単なる体験にとどまらず、今後の生活習慣や人との関わり方にも生きていくでしょう。

今回の林間学校を通じて、生徒たちは仲間との絆を深めるとともに、自然や食の営みの中にある「命の尊さ」を実感しました。この経験を胸に、1年生のこれからの歩みがさらに実り多いものとなることを願っています。

中学2年生 保育園体験

～絵本とマナーから学ぶ「志」～ 担当 三谷 淳

志共育の一環として、足立区内の約70の保育園にご協力いただき、中学校2年生は2日間または3日間の保育園体験を実施しました。事前に保育園でオリエンテーションを行い、保育の基本、社会人としてのマナーについて学び、生徒たちは真剣な表情で準備に取り組んでいました。

体験初日、生徒たちは緊張しながらも園児との関わりを楽しもうと努力していました。家庭科の授業で保育について学び、自作の絵本を作成しました。その絵本の読み聞かせでは、声の大きさや抑揚などに苦戦する姿もありましたが、保育士の方から「子どもに伝えるには、表情と声のトーンが大切」との指摘を受け、翌日からは改善が見られました。

また、挨拶や時間の厳守、報告・連絡・相談といった社会人としての基本的なマナーを、体験を通じて学び、保育士さんたちのたくさんのご指導をいただきながら、働くことの責任や意義について考えるきっかけとなりました。最終日には、生徒が自ら選んだ絵本を堂々と読み聞かせたり、一緒に仲良く遊んだり

する姿が印象的で、園児との心の交流が深まったことが感じられました。

この体験を通じて、生徒たちは「誰かのために行動すること」の喜びと難しさを実感し、今後の学校生活や進路選択においても大きな糧となることでしょう。教員としても、生徒の内面の成長を支える教育の意義を改めて感じる機会となりました。



中学3年生 職業体験

「働くとは？」を学んだ三日間 担当 富岡 雅

「100社はエントリーしないと…」。就職氷河期時代に就職活動をした人には、聞きなれた言葉です。今回の職業体験先として依頼をした企業や団体の合計がおおよそ100社。そのうち、受け入れてくださった体験先が59社。就職活動であれば、驚異の内定率です。生徒たちの体験にご協力いただいた皆様には、感謝の言葉もありません。特に快く引き受けてくださった保護者の皆様には、この場を借りて心より御礼申し上げます。

体験先を選択し、約束を取り付けて事前打ち合わせを行い、マナー講座を受けてから職業体験に臨みました。その一つ一つが、生徒たちにとって大きな学びだったと思います。戸惑うことも多い中、たくさんの経験を積んでくれました。表に見える仕事の裏で、様々な人が多くの作業をして、社会が動いているということに気がついた生徒が多くおりました。「お客様の笑顔が印象に残った」「立ち仕事が多く、働く大変さが分かった」「人の人生を左右する仕事には相当な覚悟が必要だということが分かった」「ニーズに応えることのできるサービスを、求められてからでなく、自発的に提供できる働き方ができるようになりたい」などなど、彼らの感想のすべてを紹介しきれないのが残念です。

また体験先の皆様からも温かいメッセージをいただいております。「彼らのやる気に私たちスタッフも刺激されました」「会社の雰囲気になんて慣れてきたかなというところでお別

れになってしまい、弊社の従業員も寂しがっていました」「事業や仕事を知り、理解しようとする姿勢を感じました」「澁刺と積極的に行動してくださり、とても頼もしかったです」など、本校の生徒を優しく見守ってくださった様子がよくわかりました。

学校の外へ出て、多くの人に触れながら体験できたことが、最大の収穫だと思います。体験の先にある未来の自分の後姿を、ぼんやりとでも想像できたのではないのでしょうか。中学1年生から志共育の一環として、様々な体験学習をしてまいりました。教科書とノートからは学ぶことのできない体験を胸に、志を高めて行動してくれることが、私たち教職員の願いです。体験先のリストを見たときに、どの体験先を選ぶか悩みながら、輝かせた眼の光を失うことなく、未来の自分を追いかけてください。



個人探究論文

教員になりたい人を増やすためには

——悪いイメージの改善から考える——

高橋 孝続(2024 年度足立学園高等学校 2 年 A 組 20 番)

要旨

「教員はブラック」というイメージの原因になっている諸問題を解消し、悪いイメージによって教員になることを諦めた人が、再び教員になりたいと思えるようにすることを目的とした。そこで出身校の中学校の教員にインタビューを行い調査した。インタビュー結果より、給料を増やすことよりも教員一人当たりの仕事を「teacher」と「staff」の分離によって減らすことが重要なのではないかと考えた。そこで有効なのは教育業務支援員(SSS)だ。

1. 序論

「ヒトは教育によって人間になる」。これは 18 世紀の哲学者、イマヌエル・カントの言葉だ。人類の文明を維持するために重要である教育、これが今の日本では存続の危機に瀕している。それは教員志望者の減少だ。この現象が起こっている理由に教員の業務は大変だ、ブラックだという印象があることがあげられる。日本の公立中学校の現状は、部活動や新しい時代の学校教育への対応、モンスターペアレント対応、地域住民への対応など一部本来の仕事に逸脱した過剰労働、教員志望者の減少による教員採用試験の倍率低下、団塊世代の大量離職などによる教員不足があり、教員一人当たりの負担が大きくなっている。そこで自分は「なぜ教員志望者が減少しているのだろうか」と問いを立てた。しかし、この問いへの答えは、自分たちの感覚でもわかる通り教員の過剰労働の現状から「教員はブラックな仕事だ」というイメージが強いからだとすぐに答えが出てしまった。そこでさらに「教員になりたい人を増やすためには」という問いを立てた。

先行研究では教員の過剰労働の原因に対して、「給特法」の施行、部活動の過熱化、新しい時代の学校教育による顧客志望の改革が実行されたことだと考えられていた。私はさらに教員志望者の減少の理由があるのではないかと考えた。

本論文では、「教員志望者の減少」による問題を解決するため、現代の教員へのブラックだというイメージが根付いた原因を明らかにし、どうすれば教員志望者が増えるかということを明らかにした。

本研究の目的が明らかにされることで、現代の日本の教育の質を向上させ、教育界の問題解決に貢献ができると考えている。

本論文では現役の公立教員の方々へのインタビューから意見を集め、出た意見から研究した。インタビューから、給料を増やすことよりも、過剰労働を人員の増加などによって改善することが必要だという意見が出た。さらに教員の仕事に専門的ではない事務的な仕事が含まれることから、「教師」と「事務」の仕事の分離を進めることが必要だと考えた。そのために事務員の増員と SSS の普及、増員が必要であると考えた。

2. 本論(方法、実験、結果)

2-1 研究方法

私が本研究を行うにあたって、三郷市立南中学校の 20 代の T 先生、30 代の M 先生、50 代の I 先生の 3 人の先生方にインタビュー調査を行った。質問の内容は以下の通りである。

質問1:労働時間

質問2:先行研究で示されたものの負担度合い

①部活動の過熱化

②給特法

③保護者、地域住民への対応

質問3:実際に行われた改革と効果

質問4:先生の考える「教員を増やすために必要なこと」

2-2 インタビュー結果と考察

質問1:実際の労働時間について

T 先生:決められている本当の労働時間は 8:10 から 16:40 です。しかし、実際は特に忙しくなくても 7:30 には学校に来て、20:00 くらいまでは仕事をしています。

微生物燃料電池における発電量の温度依存性

池畑 司(2024 年度足立学園高等学校 2 年 B 組 5 番)

要旨

近年、再生可能エネルギーについて大きな注目を集めている。その中の一つに微生物を使った微生物燃料電池という発電技術がある。微生物燃料電池とは、土壌中に存在する発電菌と呼ばれる細菌を使用した発電の方法である。しかし、約一世紀前から研究されているにもかかわらず、発電量がとても少なく、実用化の妨げになっている。そこで私は微生物燃料電池の発電量を左右する要因の一つである温度について焦点を当てて実験を行った。45℃～34℃の間で温度を変化させ、1 ヶ月間の発電量を測定した。5 回実験を行った結果、私は 36℃で保管することで最も発電量が多くなるという結論に至った。

1. 序論

1-1. 微生物燃料電池と社会背景

一地球が沸騰する時代が訪れる一

気候変動対策をめぐり、アントニオ・グテレス国連事務総長が日本など主要国に厳しい視線を向けている。このような報道があるほど日本は世界的にみて環境対策に対して遅れをとっているのだ。その大きな原因は発電を火力に頼っている現状にある。そこで私は、微生物電に注目した。微生物発電は二酸化炭素を出さない再生可能エネルギーでありながら、地熱発電や風力発電に比べて狭い土地で発電することができる。さらに、太陽光発電と異なり気象条件にも左右されないという利点がある。また、実用化研究の報告例は下水処理に関するものが最も多い(井上謙吾、2020)⁽¹⁾。これは電解液として有機性廃棄物を使用することができるからである。つまり、発電と同時に有機性廃棄物を処理して汚泥の発生量を抑えることができるのである。このように、微生物発電は他の再生可能エネルギーよりも多くの利点がある。

しかし、微生物発電は未だ実用化には至っていない。約一世紀前から研究されているにも拘わらず、発電量は少なく、実用化にはほど遠いのである。発電量を増加させる工夫は陽極とカソードの間のイオン交換膜⁽²⁾などで研究されているように、様々な環境要因が考えられる。私はその要因の中で温度に注目し、発電量の温度依存性を調べ、36℃付近で保管すると最も発電するという結論に至った。

2. 本論(方法、実験、結果)

泥電池を作成し、毎日起電力の測定をした。1 カ月にわたって測定をした後は条件を変えて再び実験を行った。これを 3 回繰り返した。便宜上、以下ではこれを第 1 期、第 2 期、第 3 期とする。第

1 期の実験では、学校の近くにある土手から、環境の違う 2 種類の状態の土を採取した。

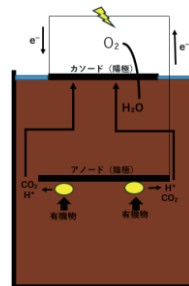


図 2 作成した微生物燃料電池

池畑君は昨年度の卒業生片山君の後輩で共同研究をしました。
下は昨年度の足立の教育 p11 片山君の研究についての紹介

発電菌を用いた発電

片山 直太 (2023 年度足立学園高等学校 2 年 B 組 5 番)

再生エネルギーの中でも近年注目されている「発電菌を用いた発電」を取り上げ、この発電方法がどのようにしたら実用的な発電量となるかを実験したものである。今日、有限資源の代わりとして再生可能エネルギーを主として使用しなければならぬといった動きの中で、まだ知名度の低い「発電菌を用いた発電」という発電方法の研究を行った。発電菌とはその名の通り自ら電子を放出する土壌内に存在する細菌の総称である。そしてその発電菌を含む泥で泥電池を作成した。発電菌の低い知名度の原因はやはり「発電量の低さ」である。本稿ではこの「発電量の低さ」をどうにか解消するため様々な方法を試した。しかし嫌気的な環境でのみ生存可能な発電菌は実験において施した環境の変化に対応できず死滅する場合があり、逆に発電量が下がってしまうことがあることが分かった。今後は個々の発電菌が最も発電できる泥電池内の環境と、電池そのものの発電効率を上げる方法の研究が望まれる。

1. 序論

近年、石油や石炭などの有限資源の枯渇が懸念されている。そこで、持続可能な社会を構築するため現在再生可能エネルギーに注目が集まっている。特に、その中でも化石燃料に頼らず有機物を微生物によって分解し発電する「微生物発電」は、分解する有機物を供給すれば半永久的に発電が可能であり、さらに下水に含まれる有機物を発電に用いることで下水の浄化に貢献できる画期的な発電方法である。

この実験の目的は有機物を分解し発電をする「発電菌」を用いて再生可能で環境にやさしい発電をすることである。

発電菌とは泥や土の中に生息する、嫌気細菌である。発電菌は身近な土壌内に存在するため、身近に採取できる土壌を利用していた。また、両方の電極に銅板を用いた上の中に含まれる有機物を微生物に分解してもらい電子を積極的に渡すことで有機物の持つ化学エネルギーを電気エネルギーに変換する。このため分解効率の良い細菌が採取した土壌内に存在すれば発電効率も上がる。

私は、発電菌がどこにも存在しているのであれば、身近な土壌から誰でも泥電池が作成できると仮説を立て、それを裏証するために研究を進めた。

2. 本論(方法、実験、結果)



図 1 実験 1 の装置図

最初に行った実験では、荒川の土手から条件の異なる 5 カ所の泥を採取し、その泥を入れた水槽に電圧計を用いて通電するかを確かめた。

- 条件 1: 干潮時露出した泥。
- 条件 2: 条件 1 の下部、空気に触れていない土。
- 条件 3: 干潮時に露出しない泥。
- 条件 4: 満潮時に露出する。
- 条件 5: 満潮時に露出するがコンクリート上に乗り上げている。

発電菌はどこにでも生息しているということを確かめるため、荒川の土手の泥を採取し簡易的な泥電池を制作し、発電が可能かを確認した。マイクログアンペア計を用いて電流値 [pA] を測定した。その結果、電流が確認されたため荒川河川敷の泥に発電菌は存在すると考えられた。



生徒が企画し、下見をして決める 修学旅行～シンガポール～

足立学園高校の修学旅行は北海道・沖縄・海外と3か所に分かれ、希望する場所へと赴きます。旅行委員の生徒は企画・下見をし、旅行会社との折衝もおこないます。今回、海外はシンガポールになりました。



シンガポール修学旅行 修学旅行委員長 阿部 勝男

2025年3月11日から15日までの5日間、足立学園としては史上2回目となる海外修学旅行を、シンガポールにて実施しました。

今回、私は修学旅行委員長として、前回の委員長である伊藤竹蔵先輩からいただいたアドバイスを参考にしながら、委員全員と協力して準備を進めてきました。学年全体の意見を可能な限り反映するため、4回にわたってFormsでのアンケート調査を行い、廊下にはカウントダウンポスターを設置するなど、旅行への期待感を高める工夫もしました。

また、旅行先の行程では「3方面から選択できるプラン」を維持するため、各方面に明確なコンセプトを設け、人数の偏りが出ないように配慮しました。さらに、それぞれの方面ごとに3つのテーマ別プランを作成し、どのような内容に興味があるかを把握するため、旅行会社との調整にも役立つようなアンケートも実施しました。

最終的には、旅行の方針決定から興味・関心の反映まで、計6回のアンケートを実施することになり、皆さんにはお手数をおかけしましたが、その分、「自分たちで作った修学旅行」と感じられる内容に仕上がったのではないかと思います。準備期間の約半年間、学年全体で一緒にワクワクしながら当日を迎えることができたのは、私にとっても大きな喜びでした。

実際の旅行では、シンガポール国立大学の学生による現地ガイドや、南洋理工大学の教授による特別講演、さらには隣国マレーシアの高校との国際交流など、日常では味わえない貴重な体験が数多くありました。また、地震のないシンガポールならではの高層建築や、多民族国家ならではの文化的多様性にも触れ、日本との違いを肌で感じることができました。

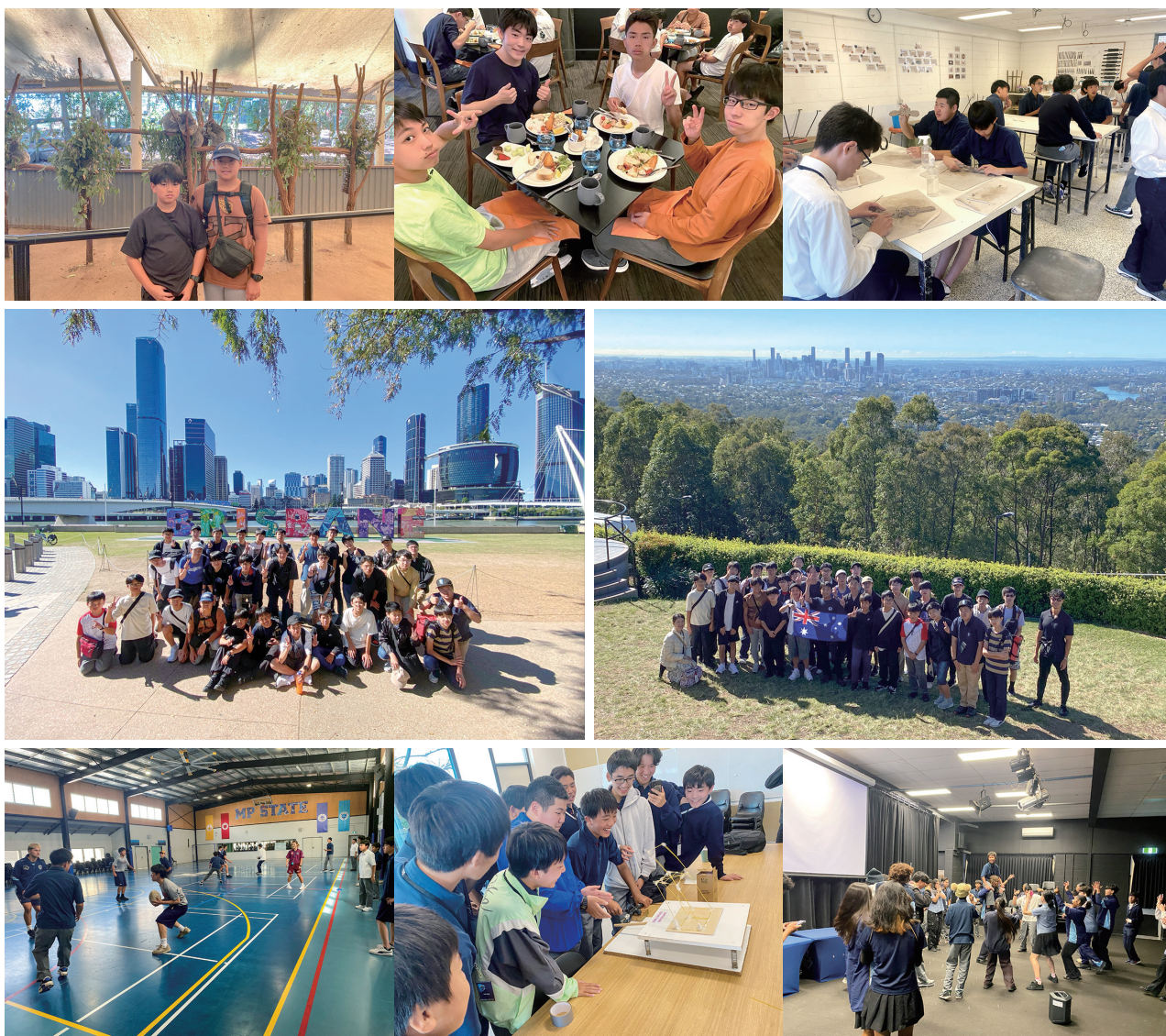
円安の影響や、シンガポール・マレーシア両国との出入国申請の煩雑さなど、直前まで課題も多くありましたが、綿密な下見と話し合いを重ねたことで、大きなトラブルなく無事に終えることができました。

足立学園の修学旅行の特徴である生徒主体だからこそできた事が多く、修学旅行委員としてもとても良い経験ができたと思います。これからもこの生徒主体の伝統を引き継いでいって欲しいです。





中学1年生から参加できる オーストラリア・スタディーツアー



オーストラリア・スタディーツアー レポート 引率教員 権 虎世

2025年8月4日から15日の約2週間、生徒31名と教員2名がオーストラリアのブリスベンへ飛び立った。高校生と中学生の割合がほぼ同じメンバーでの参加で、半数がWindaroo Valley State High School、もう半数がMabel Park State High Schoolに体験入学した。現地学校で留学生向けの授業を受けるのはもちろん、バディ（滞在中の相棒となる生徒）の授業に参加し、オーストラリアの学校生活を満喫した。例えば、先住民の歴史を学んだほか、STEM（Science, Technology, Engineering, Math）の授業として「地震に耐えられる建築物を考える」といったものにも参加した。最後には英語スピーチで締めくくった。

更に、ホームステイ体験を通じ、自国とは異なる現地の

生活様式や文化にも触れた。もっとも、到着直後には1日間のブリスベン観光もツアーに含まれている。河のほとりを散歩したり、ショッピングしたりと観光客気分も味わえたはずだ。しかし、スタディーツアーは観光だけではない。滞在中、どれだけ積極的にコミュニケーションを図れたか。困難に直面した際、自ら調べ、尋ね、行動し、問題解決できたかどうか。海外という、ほとんどの生徒が初めて味わう環境下で、彼らは色々なことに失敗し、学び、別れを惜しみながら帰国した。この体験が、彼らの未来への中継地点になってくれていることを願っている。ブリスベンを経由して、彼らの次の目的地はどこだろうか。



これから発展する姿を知る アフリカ・スタディーツアー



第4回アフリカ・スタディーツアーを終えて 引率教員 小峰 拓郎

4回目を迎えた今回のアフリカ・スタディーツアーは、第3回までには感じることはできなかった、タンザニアの潜在力を感じるツアーとなりました。

年を追うごとに整備されていく幹線道路、様々な地域を結ぶバスのターミナル開発、昨年に開通した高速鉄道（SGR）、これらの交通網は経済都市ダルエスサラームと他の地域や国を繋ぎ、人とモノの移動をより盛んにさせてくれます。交通網の発達他国の援助や投資によって成り立っていて、多くの人々がタンザニアを訪れています。街中は例年のように多くの人々でごった返し、非常に賑やか。すれ違う人々の表情や街の喧噪からは、「これからの国の発展を期待する」思いが滲み出ているように感じられました。

今回はタンザニアの首都ドドマを訪問。首都ドドマは1996年より法律上の首都に指定され、国の中央に位置しています。隣国へのアクセスを可能とする要所として注目されており、昨年には高速鉄道（SGR）で経済都市ダルエスサラームと繋がりました。その後、ドドマの南に位置するイリンガを経由し、ルアハ国立公園で2泊3日のサファ

リツアーを実施。四国ほどの面積を有し、東アフリカ最大面積を誇るルアハ国立公園。世界自然遺産に指定されているセレンゲティ国立とは景観や生態が異なり、大自然を味わえる貴重な機会となりました。

昨年と同様に、キハラカにあるセカンダリースクールを訪問。現地生徒との文化交流、現地生徒と一緒に受けたスワヒリ語会話の授業では、知識を得ただけではなく、現地生徒の学びに対する意欲や好奇心を肌で感じる事ができ、生徒への大きな刺激となりました。

これらの経験は、生徒達の価値観に大きな影響を与えています。当たり前になる日本の光景が当たり前ではないこと。水道水が自由に飲めること、道路や鉄道が日本中に張り巡らされていること、街中にマンションが建っていること。これらのことが当たり前ではないと、彼らの目には写っています。このような変化は、彼らに少しずつ影響を与え、今後の人生を大きく変えていくことでしょう。今後の生徒達の活躍を期待せずにはいられません。

価値観のアップデートが続く ラオス・スタディーツアー



ラオス・スタディーツアー 引率教員 戸井永 貴宏

第3回目を迎えたラオス・スタディーツアーには、過去最多となる17名の生徒が参加しました。10月26日から11月4日までの10日間で、日本大使館、JICA ラオス事務所、現地学校、少数民族の村、孤児院など多くの場所を訪問しました。現地の方と交流することで、ラオスの現状や国際支援の在り方についての理解を深め、同時に日本の恵まれた環境を見つめ直すことができました。

このツアーの醍醐味は、自分が持っている価値観が10日間変わり続けることです。武器を持って魚釣りに出掛けるアカ族の少年との出会い、ご両親がいなくても明るく澆漓とし

ている孤児院の子どもたちとの交流、日本ではまず見ない食材や動物が並ぶ朝市の風景など、その全てが刺激となり、自分の中で無意識のうちに当たり前になっていたことが、世界では当たり前でないということに気付かされます。教科書では学べない、実際にその地に足を踏み入れ、自分の目で見て、聞いて、感じたからこそその気付きがあり、中高生でこうした経験ができることは一生の財産になります。

ラオスという国を通して、人に優しくして助け合うことや今を楽しんで生きることなど、本当の豊かさとは何なのかを考えさせられるツアーです。

令和7年度大学入試合格状況と本校の進学指導

進路指導部長 三浦智美

1. 卒業生合格状況

国公立大学には11名（現役10名）が合格しました。主な現役の合格状況は、昨年に引き続き東京大学に1名、筑波大学に推薦1名、後期1名、国際教養大学には総合型1名、千葉大学に前期1名、都立大学に前期2名と、様々な方式で合格しました。また、既卒生では、東京大学に1名合格しました。最後の最後まで努力したからこそ、勝ち得た結果の表れです。この中には東京科学大学に在籍している卒業生の江熊くんによる自主ゼミ「江熊ゼミ」に参加していた生徒もいました。この繋がりによる合格は、今後続いてほしいと思っております。また、近年では推薦や総合型での合格者が多く、在学中の探究活動の成果が結びついていると言えます。

私立大学では、早慶上理・GMARCHに120名（現役108名）が合格しました。大学別にみると、東京理科大学や法政大学は昨年以上の合格者が出ました。志高く努力した素晴らしい結果です。卒業生数が少ない中、立派な成果を収めることができました。

表1は、過去9年間の卒業生数における各大学グループの現役合格者の比率です。各グループ昨年より低くなって

いますが、生徒達の努力が実を結び、多くの合格を出すことができました。

これらは一部のコース・生徒の活躍によるものだけではなく、各コースですばらしい結果を残しています。数年前より、「3コース制」「アラカルト授業」「探究の授業」など新たな試みが導入されており、これらの取り組みが合格実績にもつながっていると考えます。

表1

入試年度	卒業生数	国公立		早慶上理		GMARCH	
令和7年度	264	10	3.8%	35	13.3%	73	27.7%
令和6年度	256	19	7.4%	40	15.6%	75	29.3%
令和5年度	280	15	5.4%	16	5.7%	66	23.6%
令和4年度	365	16	4.4%	38	10.4%	78	21.4%
令和3年度	239	14	5.9%	30	12.6%	70	29.3%
令和2年度	289	17	5.9%	13	4.5%	50	17.3%
平成31年度	364	11	3.0%	33	9.1%	58	15.9%
平成30年度	341	21	6.2%	45	13.2%	68	19.9%
平成29年度	317	18	5.7%	40	12.6%	85	26.8%

2. 本校の進学指導

本校では、生徒たちに「将来、志を達成し、社会に貢献できる人材として活躍してほしい」という願いを持っています。彼らがそれを達成するには長い年月が必要であり、大学進学はその一つの通過点です。しかしそれはとても重要な通過点であると捉えています。その先にある志を達成できるように「早期に目標を持てる指導」「実力を養成できる指導」を2本柱としています。

「早期に目標を持てる指導」として、高1で「キャリアデザイン講演会」を実施し、10年先、50年先の自分について具体的なイメージを持たせます。社会人OBを招いての懇談会や、マイナビによる講演会も行います。また「夢ナビライブ」(10月・オンライン開催)にも全員で参加します。これは文部科学省後援の国内最大級の進学イベントで、300以上もある講義から自分が興味・関心を持つ学問分野について受講できます。「大学で学びたいことが見つかった」「将来のやりたい職業と大学での学びが繋がった」等、生徒からも好評です。高2以降では、大学生OBによる講演会、国公立進学ガイダンス、20大学による校内説明会などを実施し、それぞれの希望進路に合った、より具体的な指導を行っています。さらに、各大学のオープ

ンキャンパスや学園企画のキャンパスツアーへの参加、体験を通じて生徒の進学意識を高め、主体的に自らの進路を決定できるよう促しています。これらの経験や気づき・学びをすべてポートフォリオへ蓄積し、振り返りを行うことで、生徒たちのより大きな成長をはかります。

「実力を養成する指導」では、まずは授業を基本とし、各コースに応じた効率的なカリキュラムときめ細やかな指導で基礎学力の徹底をはかります。それに加えて夏期進学講習や高3直前ゼミ、高3国公立2次試験対策講座(すべて無料)を行い、実践力を養います。特に、高2以降の講座は科目別・レベル別に設置され、生徒が自分の実力などに応じて自由に選択することができるようにしています。最近では、高校3年生に対し卒業生による特別講座も設置しています。昨今、総合型選抜や学校推薦型選抜を希望する生徒も多くなります。通期で論文講座や総合型選抜講座も設置しています。また、本校の生徒たちは主体的に学習に取り組む者が多く、生徒からのニーズに対しては大いに応えていく所存です。このような「主体的に学ぶ生徒の育成」に重きをおいた指導をさらに続けてまいります。

表2

主な国公立大学	合格者数 (現役合格)	主な私立大学	合格者数 (現役合格)	主な私立大学	合格者数 (現役合格)
帯広畜産大学	1(1)	青山学院大学	2(1)	明治大学	18(16)
筑波大学	2(2)	学習院大学	11(10)	立教大学	16(14)
千葉大学	1(1)	慶應義塾大学	2(1)	早稲田大学	7(6)
東京大学	2(1)	上智大学	3(3)		
宮崎大学	1(1)	中央大学	12(12)		
国際教養大学	1(1)	東京理科大学	25(25)		
東京都立大学	2(2)	法政大学	24(20)		

3. 学校推薦型選抜(指定校制)について

学校推薦型選抜(指定校制)については、表3のよ
うに、青山学院大学、上智大学、東京理科大学、中央大学、
法政大学、明治大学など約140大学350名分の推薦枠
があります。高1から高3までの評定平均値や高3学力テ
スト、指定校推薦共通テストの結果等を踏まえて、校内選
考を行います。

表3 主な指定校推薦枠

大 学	学 部
青山学院大学	法
学習院大学	法・文・経済・国際社会科・理
上智大学	理工
中央大学	法・経済・商・理工
東京理科大学	工・創域情報・創域理工・理・先進工・経営
同志社大学	商
法政大学	社会
明治大学	経営

最近よく聞く 総合型選抜入試って他の入試と何がちがうの？



総合型選抜(旧AO入試)は、一般入試や推薦入試と異なり、学力試験だけでなく多面的な評価を重視する入試方式です。志望理由書、面接、小論文、プレゼン、活動実績などを総合的に判断し、受験生の人物像や将来性を評価します。特徴として、学力以外の要素(意欲・適性・課外活動・目標)を重視し、出願時期が早いので、合格すれば進路を早期に決定できます。また、大学ごとに選考方法が異なるため、自己PR力が不可欠です。メリットは、学力試験が苦手でもチャンスがあること、早期に進路が決まること、大学とのマッチングが深いことです。一方、デメリットは、準備に時間と労力がかかること、評価基準が不明確な場合があること、入学後に学力不足で苦勞する可能性があることです。つまり、総合型選抜は「学力一本勝負」ではなく、人物像や将来性を含めた総合評価で合否が決まる入試なのです。

学校行事

4

月



5

月



6

月



7

月



8

月



9

月



足立学園の学校行事を季節ごとに並べてみました。入学式から始まり卒業式までの間、多彩な学校行事があります。ここに掲載しきれなかった弁論大会や各学年の校外学習、職業体験などもあります。実際に体を使い、言葉を聞いて体験することで、心をゆたかにし、志への一步を踏み出すきっかけとしています。

10月



11月



12月



1月



2月



3月



中学 1 年の教育

学年主任 橋本 洋

早いもので、入学してから半年が過ぎました。この期間に体験した多くのことを通して、生徒たちは日々逞しく成長しています。どんなことをするにしても、まず大切なことは意欲です。この意欲にはもちろん個人差があります。得意不得意であったり、経験であったり…。しかし、どんな状況になっても、前に進むことをやめない生徒集団になることに何よりも重点を置いて、生徒たちと過ごしてきました。具体的には、毎月学年徹底事項を廊下の柱に大きく掲示し、さらに Teams「オール中！」には、具体的にに取り組むべき心構えを伝達しています。4月からすでに6個のメッセージを発信しているのですが、それぞれ表現は違いますが、全てに関わることは、「じりつ（自立・自律）」です。辛いことや苦手なことであっても、自分から行動をしていく自立。得意で安易なことであっても、謙虚さを失わず、自分をコントロールする自律。この二つの「じりつ」の意味を理解し、正しい行動に移すことが、今までも、さらにこれから、永遠のテーマとなります。

筑波山登山や体育祭・林間学校では、仲間との協力や調和を。そして、先日行った学園祭では、各クラスで課題曲を決め、クラスごとにピアノ伴奏等の工夫をしながらの合唱。2学期早々の朝学習の時間から大きな声で練習してきました。声変わりのしていない高く美しい声が2階のフロアに朝から響いていました！また、総合学習を通して学んだ「偉

人の志」をパワーポイントにまとめて、実際にお客様の前でのプレゼンテーション。教室に入れないお客様も出て、緊張しながらも一生懸命にメッセージを伝える真っ赤な顔が印象的でした！校庭ステージでは、足立学園の歴史と創立の経緯や創立に関わった方々の「志」を調べ、〇×クイズ形式でエンタメ要素も取り入れた「足立学園クイズ」。ここまで笑いを取れるのかと感じたくらい立派でした！いずれの企画も多くの方に参加いただき、生徒たちは安心した明るい笑顔で満ちていました。生徒一人一人に必ず役割があり、その役割を遂行し、それをグループ内で協力し、成功へと導く姿に成長を感じました。

日々の学校生活で一番大切なのは、やはり学習活動＝授業です。特に1学年では「チャイムは自席で！」をスローガンに、授業に向かう姿勢と授業準備の大切さを徹底しています。1週間に最低でも1回は必ず実施される小テストをものすごく重要なものと捉え、4月から身につけている「じりつ」を根幹に、小さなことこそ疎かにしない学習習慣を今後も促していきます。結果も大切ですが、そこにたどり着く過程の大切さを最重要視しています。

今後さらに身体も逞しくなり、多くの学校生活を通して、心も広く逞しく、さらに知識もたくさん身につけていく生徒の姿が楽しみです。

高校 1 年の教育

学年主任 岩佐 隆司

私が高校1年生だったのは38年前。そこから随分と時は流れたはずですが、その時の記憶はかなり鮮明です。文化祭などの学校行事にタマシイの全てをかけていたといっても過言ではない高校生活。卒業するとき親に「3年間よく遊びぬいたのう!!」と褒められました。

今、高校1年生を目の前にして思うことは、「みんなとてもまじめに授業受けてるなー」ということ。先日の授業参観をご覧になった保護者もお感じになったと思います。

ほんとにまじめですね。これはもう、ここまでの小学校、中学校の教育の成果であり、なによりも家庭教育の賜物であると確信しています。だからといって勉強だけでなく盛り上がるときは、ちゃんと盛り上がる!!学園祭も盛り上がりました。大行列ができていたA組のサバゲーにB組I組のお化け屋敷、私が行ったときはいつも売れすぎて準備中だったE組のクレープ、安定のD組パンケーキ、両日も完売が早すぎたF組のチュロス、ひたすら淹れたての珈琲を提供し続けたH組の生徒達はいつでも喫茶店をやるでしょう。C組のたこ焼きはただのたこ焼きではありません。ロシアンでした。G組のカジノ企画は企画投票1位!!

みんなよく遊びました!!よく遊ぶ生徒はその後よく勉強します。今してなくてもこの後するようになります。集中力の根源は「遊び」ですから。そして勉強で遊べるようになったら最強です!!

心の畑を耕す 種を植える 水を撒く

高校1学年の学年目標です。

心の畑を耕すのは経験です。チャレンジです。チャレンジしなさいというだけではだめなので、私も生徒に負けないようチャレンジしていこうと思います。

日常の一コマ



授業の一コマ



ひとりでも多くの人が「正解を探す人生より、創る人生」を歩める場を作り続ける。これが私の志です。

2002 年度卒業生 **和辻 龍** さん



技術革新が目覚ましい昨今は、ネット検索や生成 AI などを使用するとすぐに知りたい情報が手に入る時代かもしれませんが、そんなお手軽な正解を得られる便利な時代だからこそ、あえて自己・他者・社会・将来について、考える力を深めて「自分の正解を創る人生」を歩んでもらいたいと思っています。

このように考えるようになった転機は、生徒と教員の両方の立場で過ごしたドイツ生活でした。ドイツは、学校のクラス、大学の研究室、街中のレストラン、どこにいても「私の意見はね」という言葉と共に、「なぜ？」の問いとそれに対する理由をととても大切にします。詳しくは、足立学園の図書館にも置いてある著書「こんなに違う!? ドイツと日本の学校」(産業能率大学出版部)を読んでみてください。

私は帰国後、学校に教員として勤務すると同時に、私の志をひとりでも多くの人と共有して一緒に歩むために、「誰でも自分で自分なりの正解を創って挑戦できる場」を作って活動しています。熱意溢れる中学生、高校生、大学生が集まり、紀伊國屋書店における講演会、出版社における中高生向け哲学雑誌の創刊、コンサルタント会社における経営者向け哲学対話会など、自由な発想と活発な行動で企画運営してくれています。学生は、「学校と会社」「学生と社会人」の境界を越えて実社会の中で「自分なりの正解」を創りながら活躍してくれています。また、私は国内だけでなく「日本と外国」といった境界を越えるべく、エジプトと日本の懸け橋になる活動をしています。この夏には、

首都カイロで開催された日本語スピーチコンテストの審査員を務めました。コンテスト入賞者の副賞に、著書「うまくいく思考の転換」(産業能率大学出版部)を添える事で「私なりのスピーチコンテストを盛り上げる正解」を創りました。この本も足立学園の図書館に置いてあるので是非読んでみてください。

在校生の皆さんにも、時に学校から飛び出して、時に日本から飛び出して、境界を越える一歩を是非踏み出してほしいです。「自分の正解を創る人生」は、意外に一歩踏み出したすぐ先にあるかもしれません。ひとりだと心細い人は、足立学園のスタディツアーに参加して新鮮な環境に身を置いてみるのも良いと思います。「学生だから…」「語学力が足りないから…」と線引きするのではなく、「自ら学び心ゆたかにたくましく」境界を越えてみてはいかがでしょうか。

いつの日か、皆さんの「正解を創る人生」を語ってくれる日が来ることをこっそりと楽しみにしています。

●和辻さん著書表紙



エジプト・カイロにおける
スピーチコンテスト入賞者と



■和辻さん、防衛省自衛隊から感謝状を授与されました。

2025 年 11 月 23 日(祝・日)防衛省自衛隊より感謝状が授与されました。

和辻さんは、大学 2 年生の時から自衛隊に携わって一般社会と自衛隊の懸け橋になって活動しています。

学生はもちろんのこと、看護師など社会人に対する自衛隊への入隊紹介補助、大学生向けに、松戸駐屯地にある縫製工場見学、現役の自衛官との懇談、幹部自衛官と共に防衛省のインターンシッププログラムを企画実施するなど、国に貢献している日頃の活動の積み重ねにより、この度の授与となりました。

和辻 龍(わつじりゅう)

●2000年3月 足立学園中学校 卒業、2003年3月 足立学園高等学校 卒業、明治大学理工学部電気電子工学科 卒業、明治大学大学院理工学研究科電気工学専攻 修了、独 Clausthal University of Technology 電気工学博士課程研究員 任期満了
【プロフィール】 明治大学付属中野中学高等学校に数学科講師として勤務する傍ら、東京家政大学の研究室顧問、企業の社外取締役、兵庫県姫路市の観光大使、日本ライフセービング協会の認定ライフセーバーなど、多岐に渡る活動をしている。かつてドイツに滞在して、博士課程研究員として大学に勤務しながら生徒と教員の両方の立場で現地学校に通った。エジプトでは日本語スピーチコンテストの審査員を務めるなど、年齢、肩書、国境、あらゆる境界を越えて活動している。著書に「こんなに違う!? ドイツと日本の学校」(2020 年産業能率大学出版部)、「うまくいく思考の転換」(2025 年 産業能率大学出版部)など。

大会結果・表彰

◆中学剣道部

- ・5ブロック秋季大会第3位

◆中学バスケットボール部

- ・東京都夏季連合大会 兼 夏季選手権大会
足立支部予選 準優勝
- ・東京私立中学校バスケットボール大会 第3位
- ・東京都U15バスケットボール選手権大会 ベスト8

◆中学アメリカンフットボール部

- ・第12回マリンボウル 準優勝



- ・U15 フラグフットボール世界大会
「ジュニアインターナショナルカップ」
日本代表選出 準優勝 鈴木翔太郎
- ・2025年度日本フラッグフットボール選手権南関東地区
準優勝

◆中学柔道部

- ・関東中学校柔道大会 55kg級 優勝 星凌介
- ・関東中学校柔道大会 90kg級 第3位 田畑陽大
- ・全国中学校柔道大会 55kg級 優勝 星凌介

◆中学卓球部

- ・第26回全国中学選抜卓球大会 優秀賞(ベスト8)
- ・令和6年度 第34回東京都中学校区部新人卓球大会
団体戦 優勝
- ・令和6年度 第31回関東中学校選抜卓球大会
団体戦 優勝
- ・令和7年度 東京都中学校総合体育大会 団体戦 第3位
- ・令和7年度 関東中学校卓球選手権大会 団体戦 優勝
- ・令和7年度 全国中学校卓球選手権大会
団体 優秀校(ベスト13)



◆高校アメリカンフットボール部

- ・令和7年度 春季大会兼第51回関東高等学校アメリカンフットボール大会予選 準優勝
- ・第51回関東高等学校アメリカンフットボール大会 第3位
- ・令和7年度東京都秋季大会 第3位
- ・第56回全国高校選手権大会〈関東地区〉出場

●OB 高橋周平さん(明治大学4年)

1000Yrd ラッシャー 新記録 1401yd、歴代1位を獲得

◆高校卓球部

- ・令和6年度 第52回全国高等学校選抜卓球大会
団体ベスト16
- ・令和7年度東京都高等学校春季卓球大会 団体 準優勝
- ・令和7年度全国高等学校総合体育大会卓球競技 東京都予選会
ダブルス 3位 石川恵大・高橋惺介
- ・令和7年度全国高等学校総合体育大会ダブルス出場
石川恵大・高橋惺介

◆高校剣道部

- ・全日本都道府県対抗剣道優勝大会東京都予選(先鋒の部)
優勝 高2D 長谷川秀吾
- ・第73回全日本都道府県対抗剣道優勝大会(東京都代表)
第3位 長谷川秀吾
- ・東京都高等学校春季剣道大会兼関東大会予選男子個人
第3位 長谷川秀吾
- ・全国高等学校剣道大会個人 東京都予選
優勝 長谷川秀吾
- ・全国高等学校剣道大会団体 東京都予選 準優勝
- ・国民スポーツ大会 5位入賞 長谷川秀吾(副将)
- ・東京都高体連第一支部剣道大会 個人・団体 優勝

◆高校柔道部

- ・第47回全国高等学校柔道選手権大会 66kg級
優勝 嶋貫蓮
- ・全国高等学校総合体育大会柔道競技東京都予選会 66kg級
優勝 嶋貫蓮
- ・全国高等学校総合体育大会柔道競技東京都予選会 60kg級
優勝 石川一虎
- ・国民スポーツ大会 東京都予選 60kg級 優勝 中村享義
- ・国民スポーツ大会 東京都予選 66kg級 優勝 嶋貫蓮
- ・国民スポーツ大会 東京都予選 100kg級 優勝 久保智暉
- ・全日本ジュニア 東京都予選 66kg級 準優勝 嶋貫蓮
- ・全国高等学校総合体育大会柔道競技 60kg級
第3位 石川一虎

大会結果・表彰

- ・全国高等学校総合体育大会柔道競技 66kg級
準優勝 嶋貫蓮

- ・関東高等学校柔道大会 団体 準優勝



- ・関東高等学校選抜柔道大会 66 kg級 第3位 柴崎皇輝
100 kg級 準優勝 久保智暉

- OB 武岡毅さん(パーク24) 66kg級世界選手権 優勝

◆高校バスケットボール部

- ・東京都第3支部新人大会 優勝

◆高校ソフトボール部

- ・東京都高等学校総合体育大会 準優勝
- ・関東大会ベスト8
- ・東京都高等学校体育連盟ソフトボール専門部
ベストメンバー賞 杉崎維・熊丸蓮・赤川海斗
- ・全国私学大会出場
- ・秋季大会 優勝(全国高校選抜大会出場)



◆高校水泳部

- ・東京都高等学校春季水泳競技大会 第6位 村松浩太
- ・東京都高等学校新人水泳競技大会 第5位 村松浩太

◆高校ゴルフ部

- ・東京都高等学校ゴルフ選手権春季大会 優勝 金杉元明

◆書写・書道

- ・第61回全日本書初め大覧覧会
優秀団体賞(全国表彰)
日本武道館奨励賞(全国表彰) 岡田一桜
- ・第41回高円宮杯日本武道館書写書道大覧覧会
優秀団体賞(全国表彰)
- ・日本武道館奨励賞(全国表彰) 加藤由康・板谷彰徳

◆吹奏楽部

- ・第65回東京都高等学校吹奏楽連盟 吹奏楽コンクール
東日本大会予選 金賞 及び 代表選考会選出

◆写真部

- ・あだち区展 2025 写真部門賞少年の部
優秀賞 清水谷颯洛
- ・東京都私立中学校高等学校写真・美術展 入選 四釜明治

◆クラフト同好会&鉄道研究部

- ・全国高等学校鉄道模型コンテスト2025 モジュール部門
ベストクオリティ賞

◇ライフ・イズ・テック レッスンコンテスト

- ・敢闘賞 吉村錦南
- ・奨励賞 野澤晴翔・辻本佳資・吉原耀知・青木洸・浅野航輝・伊藤颯成

◇インラインスケートWorld Championships Beidaihe 2025 鈴木淳一郎

Road【100 m、1 Lap】出場

Track【200 m、500 m、1000 m】出場



◇全国高校生メンズフィジークチャンピオンシップス 2025 第2位(172cm超級) カトリ俊

◇全日本武術太極拳選手権大会 棍術(こんじゅつ)の部 第5位 鈴木真琴

◇全日本武術太極拳選手権大会 刀術(とうじゅつ)の部 第9位 鈴木真琴

◇第23回南関東ジュニア武術太極拳大会 ジュニア規定競技部門 A 男子長拳総合の部 優勝 鈴木真琴

◇第8回世界青少年「志」プレゼンテーション大会 優秀賞 岩浪 琉斗 志共育貢献賞 足立学園中学校・高等学校



◆…足立学園のクラブ ●……OBの実績 ◇……個人活動の競技など

オーストラリア Mabel Park State High School 生徒来校！

11月25日、オーストラリアからメイベルパーク SHS の生徒20名と校長先生、先生4名が足立学園に来校しました。前日はスカイツリーや浅草を楽しんだ皆さんですが、足立学園に来ることを一番楽しみにしてくれていたとのこと。ウェルカムセレモニーでは、迫力ある柔道部や剣道部のパフォーマンスに圧倒されながらも非常に興奮している様子でした。

また、バディとの顔合わせでは、オーストラリアで一緒だった本校の生徒が抱きつき、膝にのせてもらって再会を喜ぶ姿もありました。2限目は書道の授業体験を行いました。書道担当の相澤先生の英語の説明を聞きながら基本のパーツの書き方を習い、好きな言葉を漢字で表現したものや元々知っていて好きな漢字を書いて作品にしました。3限目はバディのクラスに行って日本の授業を受けてもらいました。その後ランチタイムでは学校のカフェテリアでパーティープレートを用意しながら、コミュニケーションをとっていました。足立学園の学食の

定番メニューであるラーメンとカレーが提供されると、とても喜んでくれました。雑談の中、前日の浅草散策の様子を話してくれた女子生徒は、着物の着装体験がとても印象深かったとのこと。着物を着て天ぷらなどを食べ、草履を履いて街歩きをしたそうです。帯がきつくてとても疲れたと言っていました。

午後の授業は和菓子としてどら焼きづくりを行いました。生地をつくって、ホットプレートに流し込むも、ひっくり返すのに苦戦していてキャーキャーとどのグループも楽しそうに作業をしていました。フェアウェルセレモニーではメイベルパークの女子生徒4人が Kapa Haka (ケパ・ハカ) を披露してくれました。記念品を贈呈し、最後に本校から記念品を贈呈し、お互いに別れを惜しみながらセレモニーを終えました。陽気でキラキラした笑顔が印象的な皆さんと素敵な時間を過ごせて嬉しかったです。



編集後記

◆今回は「体験から学ぶ」をテーマに『足立の教育』の編集をしました。私は高校時代、生徒会役員を務めていました。その活動の中で学んだことは現在の仕事の中でも役立っています。授業の中で得る知識や教養と授業以外の場面で得る経験や考え方、立ち振る舞い、どちらも自分の人生を作っていく大事なものです。『足立の教育』を読んだ方が「自分はどんな体験をしようか」と挑戦する心を持ってくれたら、とても嬉しいです。(堂添)

◆夏に那須のテーマパークでグランピングをしました。テントの向こうにはアルパカがいました。5歳の娘はこわごとスコープで餌をやり、9歳の息子は「鳴き声がマイクラと一緒に！」と喜んでいましたが近寄りませんでした。動物の息遣い、におい、毛の手触り、街灯のない真っ暗な星空、大きな虫、高原の朝の空気は、まさに家族にとって「体験からの学び」でした。皆さんの「体験からの学び」を編集していて、バラエティ豊かでとても羨ましく思いました。ぜひその経験を大切にしてください。(八重樫)

足立学園の情報はこちらをご覧ください。



<https://www.adachigakuen-jh.ed.jp/>



足立学園チャンネル



@adachigakuen_jh



adachigakuen.jh



@adachigakuen2023



@adachigakuen2025

OB の近況や活躍をぜひお知らせください！！

夢をかなえた、事業を興した、お店を持った、今こんな仕事していますなど、たくさんの情報待ってます！

<https://www.adachigakuen-jh.ed.jp/adachi-kizuna.html>